



介護福祉学校と栗山高校を隔月で取材！

尊敬する祖母の仕事を目指す

さとう かずな
佐藤 夏珠茄 さん
(介護福祉学校1年)



介護の仕事を見て育つ

全国で唯一の町立介護福祉士養成校である北海道介護福祉学校の入学式。今年も新たに23人が入学しました。新入生代表挨拶をしたのは、幼い頃から介護の仕事が身近だったという佐藤夏珠茄さんです。

佐藤さんが幼い頃、自宅の近くに住んでいた祖母は、介護の仕事をしていました。「母が仕事の時、祖母が私を自分の職場に連れて行き、介護施設で過ごすこともありました。利用者さんと遊びながら、祖母の仕事ぶりをなんとなくみて育ち、高齢者に温かく接し、ときばきと仕事をこなす祖母が大好きで、とても



新入生を代表して挨拶をする佐藤さん



も尊敬していました」と話します。

祖母が認知症に

憧れの祖母は、介護の仕事で退職後、佐藤さんが小学校6年生の頃に、認知症を発症し、デイサービスへ通うようになります。祖母の家では夕方まで家族が不在のため、デイサービスから戻ってくるのは、佐藤さんの自宅。学校から帰ってきた佐藤さんは、祖母が自宅に帰るまでの間を一緒に過ごしていました。

高齢者を介護する姿と介護が必要になった祖母。その両方を見て育ち、自然と介護の道を目指すようになります。町立で授業料も他の学校に比べ安価なことや、親族に同校の学生がいる友人から、と

ても良い学校だと聞いていたこともあり、介護福祉学校への進学を決めました。

自分の力で生きていきたい

「たくさんの難しいような教科書を見たり新入生に知っている人がいないことを考えたりすると、これから始まる本格的な授業に少し不安を感じてしまいます。でも、高校で務めていた生徒会では、友人から要領が良いと言われていたので、自分の長所を活かしながら2年後の国家試験合格を目指したいと思います」と前向きです。

継続することが苦手だという佐藤さんですが、高校1年から継続しているアルバイトもこのまま続けていくそうです。

「この先の将来はどんなことが起こるかかわからなく不安でいっぱいです。親にはあまり負担をかけたくないので自分の力で生きていけるよう、夢に向かって進んでいきます」と笑顔で話しました。

半世紀にわたり 高齢者に愛の手

その志は永遠に

我が国の社会保障が充実し、福祉元年と言われた昭和48年、藤田マサさんが初代会長となり栗山町月見草の会の前身となる「栗山町婦人ボランティアクラブ」が発足し、会員15人による活動がスタートしました。

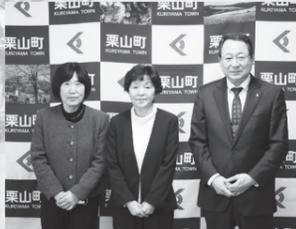
「高齢者に愛の手」を合言葉に「愛の訪問運動」として、一人暮らし高齢者や寝たきり高齢者のいる家庭への訪問を始めたといえます。

昭和55年には「栗山町月見草の会」と改称。昭和57年5月、栗山町社会福祉協議会が始めた現在の配食サービスにあたる給食サービスへの協力や、電話サービスを開始するなど、多くの高齢者の在宅生活を支えてきました。

令和に入ってからは、新型コロナウイルス感染症の影響

を受け活動の制限が余儀なくされますが、そんな中でも、手作りマスクの制作や、福祉施設の草取りボランティアなど、常に弱者に寄り添った活動を続けてきました。

会員の減少などを受け、令和7年3月をもって、同会は惜しまれながら解散しましたが、町民の心に刻まれたその高い志は、これからも永遠に引き継がれていくことでしょう。



佐々木学町長へ解散の報告に訪れた、横岡光子会長と土田清美副会長

寄附に対し感謝状

町内富士の長尾康司さんが「子どもたちのために使ってもらいたい」と町に100万円を寄附し、4月11日、佐々木学町長から感謝状が贈呈されました。長尾さんは、長年、栗山小学校の田植えや稲刈りの授業などに協力されています。

町内の朝日産業株式会社（廣岡延博代表取締役）が町に200万円を寄附し、4月9日、佐々木学町長から感謝状が贈呈されました。廣岡代表取締役は「子どもたちのために使ってもらいたい」と話していました。

